



北小の風

大津町立大津北小学校
学校だより 第9号
令和7年9月15日(月)
文責:校長 上田 玲子

○校訓:よく学び やさしい心と強い体 額に汗する北っ子

○学校教育目標 「夢に向かって挑戦し とともに高め合う児童の育成」

社会を明るくする運動 本校から2名の作文提出

前期後半がスタートし、3週間が経ちました。良いスタートを切った児童は1段階成長した様子を見せています。また、夏休みの作品として「社会を明るくする運動」に関わる作文を書いてきていた児童の中で2名の作文を提出いたしました。読むだけで明るい気持ちになれますのでご紹介いたします。

【ぼくのお父さん 5年 宇野まさし】

ぼくのお父さんは、保育園で園長先生をしています。いつもやさしいです。園長先生のお仕事だけでなく、神社の仕事だったり、神楽を教えたりいろいろなことをしています。そのほかにも、保護司というお仕事もしています。

ぼくは、保護司という仕事を知りませんでした。お父さんにどんな仕事しているのか聞いてみました。保護司という仕事は、悪いことをしてしまった人たちの立ち直りを手伝える仕事、立ち直りを手伝えることについて地域の人に理解と協力をお願いする二つの仕事があるそうです。お父さんも時々、黄色いジャンパーを着て「社会を明るくする運動」に参加しています。

お父さんは、前に保護司をしていた人にすすめられてなりました。仕事は大変かなと思ってお父さんに聞いてみました。でもお父さんは、「保護司の仕事で大変なことは思いつかない。その人たちと関わっていくことで立ち直っていくのを見るとやっつけてよかったと思う」と言っていました。でも、その対象の人に会いに行ったり、家にも来てもらったりすることもあるそうです。そこで、相談にのったり、約束を守ったりするように話をするそうです。保護観察官の人とお父さんと二人三脚でやっています。

きっと、お父さんは、「大変だな。難しいな」と思っていることもあると思います。それを言わないお父さんはすごいと思います。お父さんのように大変だとしても、悪いことをしてしまった人たちの立ち直させてくれる人がいると、ぼくたちは安心して生活ができます。立ち直おうとしている人も一緒にがんばってくれる人がいてうれしいと思います。

ぼくは、お父さんが保護司というお仕事もしていると聞いておどろきました。ぼくみたいに保護司という仕事を知らない人がいると思います。もっとみんなに知ってほしいと思いました。ぼくもお父さんみたいに、困っている人によりそえる人になりたいです。



【ありがとうの鉛筆 6年 西村 駿】



僕は、一年生の時からずっと、塾に通っています。塾のスケジュールとして、一ヶ月に一回ほどの周期で、イベントや、テストなどがあります。その中に、「全国統一小学生テスト」というものがあります。六月に、そのテストを受けることになりました。この全国統一小学生テストは、いつも通っている校舎ではなく、遠くにある校舎までいかななくてはなりません。ぼくと同じクラスの人たちは、全員受けないと言っていたので、この日の朝は、テストを受けるという緊張感と、自分以外誰もテストを受けないという少し心細い気持ちが入り混じり、少しゆううつな気持ちでした。車に乗って向かいました。

教室に入ると、知らない人がたくさんいて、周りの視線に少し緊張しがちがちなりながらも、席に座りました。窓からは、きれいな青空が見えました。それをきれいだなと思ってながめている間も周りが着々と、何分後かに始まるテストに向けて勉強していました。ぼくもみんなのまねをしようと、テキストを開きましたが、何から着手していいかわからず、ただボーッと、教室にいる人たちの顔をチラチラ見ていました。

すると右角に、真剣に勉強をしている男の子がいました。その時は、しっかりと顔を見ることはできなかったけど、「少し見たことあるような…」とっていると、テストを担当する先生が教室に入ってきました。先生からのマークシートの書き方についての指導があった後、テストが始まる前の十分休憩のときに、もう一度、持ち物確認をしていると、「シャーペンは禁止 マークシートに回答を記入するときは、鉛筆を使ってください。」と書いてあるのに気付き、がくぜんとなりました。ぼくはシャーペンしか持ってきていなかったからです。どうしようかと悩んでいた時に、右角にいた男の子が、席まで来て、「君、前のテストであつたよね。」と言ってきました。しっかりと顔を見て、その人が、塾の友達の学校の友達だということに気がきました。今日、鉛筆を忘れたことを話しました。するとその人は、ぼくのところに鉛筆を一本持ってきたので、「ぼくは持ってきたよ。」とでもいうのかと思っていたら、「じゃあこれ、貸してあげるよ。」と言って、鉛筆を貸してくれました。

その時も、「ありがとう」とは言いましたが、今思うとそこまで心がこもっていなかったように思いました。ふと、その子の筆箱に目をやると、先が丸くなって書きにくそうな鉛筆が、一本だけ入っていました。でもぼくが借りた鉛筆は、先がとがってとても書きやすそうな鉛筆でした。そうなると、この子は、とがった鉛筆と、先が丸い鉛筆を持ってきていて、本当は、自分が使うはずだった鉛筆を、貸してくれたとわかると、とっさにもういちど「ありがとう」という言葉が無意識に出ました。このときのありがとうは、心がこもった本当のありがとうだと思いました。テストが終わったあと、その人の席に向かい鉛筆を返そうとしたとき、少し照れくさそうに「それ、もらっていいよ。」と、その子が言いました。そのかわり、その子には消しゴムをあげました。たった数時間のことだったけど、朝のゆううつが吹き飛ばすほどの、とても心が温まる時間でした。このことを通して、自分が相手にできるやさしい行動が、相手の気持ちを変える力をもっていることを知りました。これからは、困っていい人には、自分でもできる行動をしていきたいです。